

神聖ローマ帝国大使の見たヘンリー八世の離婚問題

——Eustache Chapuys の書簡を用いて——

高 梨 久 美 子

はじめに

一五三〇年代初期、ローマ教皇庁でヘンリー八世 Henry VIII の離婚訴訟の審理が行われていた。その間、イングランド国内ではどのような動きがあったのか、またどのような政策が王や顧問官たちによって遂行されたのかについての研究は数多くなされている。⁽¹⁾しかしこの訴訟の相手側の大使がイングランドの政策をどのように受け止め、本国に伝えたのかということに関する研究は管見の限りでは見当らない。従来のイングランド史研究は、ヘンリーの離婚に係する、イングランド国内の事実経過を可能な限り正確に明らかにすることに力を注いできた。イングランド国外の史料は、国内の事実経過の確認手段として、副次的に用いられるに過ぎなかった。しかしながら、ヘンリーの離婚問題は、イングランド一国だけの問題ではない。関係する国々が、この問題をどのように受け止めて対処しようとしたのかを検討することは、イングランドをヨーロッパ史の枠組みで考える上で避けては通れない作業ではなからうか。本稿では、そのような試みにささやかではあるが寄与することをめざしたい。さらに付け加えるならば、ヘンリーの離婚問題をイングランド教会のローマ

教皇庁からの離反の契機として考えるとき、この離婚訴訟に及ぼした相手側の作用を見ることは、イングランド宗教改革を考える上でまた別の新しい視点を示すものと思われる。

ヘンリーの離婚前年の一五三二年当時、ローマでの離婚訴訟に於いてヘンリー側は不利な状況に置かれていた。この訴訟は一五三〇年一〇月からは教皇庁控訴院 *Rota* で審理されるようになっていたが、控訴院はあくまでもこの訴訟はローマで審理されるべきであると主張し、それ以外の地での審理を認めようとはしなかった。そしてヘンリーの弁護士は、王からの正式な委任状なしには王がローマに出頭しない理由を述べに入廷することすら許されない状態であった。ヘンリーの離婚訴訟の相手側であるキャサリン・オブ・アラゴン *Catherine of Aragon* を擁護する在ローマ神聖ローマ帝国大使たちは、この訴訟に迅速に判決を下すことを教皇クレメンス七世 *Clemens VII* に常に強いていた。教皇は皇帝側に強く脅されていた。皇帝側はヘンリーが委任状を出さない以上、教皇が最終判決を下す以外にこの離婚問題の解決はないと主張していた。しかしメデイチ家出身の教皇は、フランスとの関係をも重視したいと望み、当時フランス王と良好な関係にあったイングランド王の離婚訴訟に判決を出すことを躊躇し、この訴訟はローマで膠着状態に陥っていた。

ローマでの離婚訴訟がこのような状態にあった時、イングランド在住の神聖ローマ帝国大使がキャサリンの甥である皇帝カール五世 *Karl V* に伝えたイングランドの情報は、皇帝や皇帝の顧問官たちが対イングランド政策を決定する際に少なからぬ影響を与えたものと考えられる。そしてそれはまたローマでの離婚訴訟の行方にも作用を及ぼしたことであろう。一六世紀は西ヨーロッパの君主たちが、常駐外交制度を採用し始めた時期でもあった。

本稿では一五二九年から一五四五年まで在イングランド神聖ローマ帝国大使としてヘンリー八世の宮廷に遣わされたウスタツシュ・シャピュイ *Eustache Chapuys* が皇帝に宛てた書簡を用いて、帝国大使が見たヘンリーの離婚問題を考察する。シャピュイの書簡を分析することにより、イングランド内の視点でなく外国人の目から見たイングランドの政策を検討し、シャピュイが果たした帝国大使としての役割を探りたい。そこで一五三三年前半シャピュイが、イングランドの国

制史研究上重視されている上訴禁止法 *Act in Restraint of Appeals* 制定についてどのような面で注目しながら、それを情報として本国に伝えたのかを特に取り上げて考察したい。またその情報を受けた後の帝国の対イングランド政策はいかなるものであったのかを見てみたい。時期は上訴禁止法制定前後六ヶ月間に限定し（一五三三年一月から一五三三年六月まで）、この間シャピュイが皇帝に宛てた書簡（全一七通）並びに、皇帝が帝国大使たちに与えた指令の書簡（全四通）から探ることにしたい。

本稿は暗号文を多く含むシャピュイの書簡をオリジナルを用いて論じることができなかった。そのため *Calendar of Letters, Despatches and State Papers, relating to the Negotiations between England and Spain, preserved in the archives at Simancas and elsewhere*（以下 *Spanish Letters* と略す）に英語翻訳され、収録されている活字史料を主に用いた。また *Calendar of Letters and Papers, Foreign and Domestic, of the Reign of Henry VIII*（以下 *Letters and Papers* と略す）に同じく英語翻訳されているが、抄録の形で載せられている帝国側の史料を補助として用いた。なお本文中（ ）が多く付加されている。これは筆者によるものである。

第一章 一六世紀の外交官について

第一節 一六世紀の外交官に関する研究

マッティンリー *G. Mattingly* は *Renaissance Diplomacy* の中で一五世紀にイタリア諸都市の中で駐在外交 *resident diplomacy* が生じ、発達し、それが徐々に西ヨーロッパの諸政府によって広い範囲で受容された過程を辿った。⁽²⁾ マッティンリーの主たるテーマは一五世紀からの二世紀に亘る駐在外交の発達である。ルネサンス外交の研究に於いて彼は多大な貢献

をしたが、個々の外交職の発達に関する詳しい分析はしていない。マッティンリーはまた博士論文 *Eustache Chapuys and Spanish diplomacy in England (1488-1536)* の中で帝国大使シャピュイの経歴を考察し、*Spanish Letters & Letters and Papers* を用いてシャピュイの大使としての活動と五〇年間に亘るイングランドにおけるスペイン外交についての研究をした。⁽³⁾ これはシャピュイの研究を行うに当たって、その基礎となる貴重な研究である。しかしこの書に於いてマッティンリーはシャピュイの書簡をヘンリー八世の離婚問題により生じた出来事を把握するために用いており、イングランドの政策に対するシャピュイの視点の検討はしていない。そしてまたマッティンリーはキャサリン・オブ・アラゴンの離婚史をこの二つの史料に収録されているシャピュイの書簡そしてヴェネチア大使から総督に宛てた書簡を用いて著している。⁽⁴⁾ これも先の書と同様、これらの史料をキャサリンの離婚の事実経過を知るために用いている。

駐在外交の発達に関する詳しい分析を行ったのはマクマーホン *L. MacMahon* である。マクマーホンは博士論文 *Ambassadors of Henry VIII* のなかで、テューダー朝のイングランド外交職に関する研究をした。⁽⁵⁾ マクマーホンはヘンリー八世治世期に書かれた外交公文書をオリジナルの写本とともに *Letters and Papers* を用いて分析した。そして当時の大使たちを派遣された地域別、年代順にリストアップし、ヘンリー八世即位後大使職の重点が一時的な特別大使職から徐々に駐在大使職へと移っていった事を示した。マクマーホンの考察は一六世紀の大使職に関する研究に多くの示唆を与えたが、彼の研究対象はイングランド大使に限定されており、神聖ローマ帝国大使を扱っていない。

帝国大使たちの書簡を用いた考察について言えば、それは既に一九世紀にフルード *J.A. Froude* の *The Divorce of Catherine of Aragon* の中で行なわれている。⁽⁶⁾ フルードは主として *Spanish Letters* を用い、*Letters and Papers* を補う。キャサリンの離婚史を著した。フルードはイングランドで新しく公刊された帝国大使たちの急送公文書を用いた。フルードはイングランド内の史料ではなく帝国側の史料を用いてヘンリー八世の離婚の経過を明らかにし、イングランド宗教改革の真の歴史を発見したいと考えた。これは一九世紀当時、宗教的党派心でしか語られなかったヘンリーの離婚問題を

イングランド外からの観点を踏まえて考察した貴重な試みであった。しかしフルードの試みは帝国側の史料を用いてイングランド内のこの離婚問題の経過を辿ることであり、一人の帝国大使がどのような視点からイングランドの出来事を観察し、情報としてそれを皇帝に伝達したのかということに関する考察を行ってはいない。そして一九世紀人であったフルードの描く離婚史は、彼自身語るようにブリテン帝国の礎を築いたイングランド宗教改革を賛美するといった歴史観のもとで編み出されたと見てよいだろう。本稿では帝国大使たちの諸書簡の中でシャピュイの書簡に注目し、シャピュイのヘンリーの離婚問題に対する視点を考察したい。

第二節 一六世紀の神聖ローマ帝国大使について

マッティンリーによれば⁽⁷⁾、一五世紀前半にイタリアで発達した常駐外交制度を初めて採用した君主は、フェルナンド・オブ・アラゴン Fernando of Aragon であった。カール五世はスペイン王（カルロス一世）になった時（一五一六年）、フェルナンドによって設立されたスペインの外交ネットワークを継承した。皇帝の外交政策は基本的に静的で防衛的かつ保守的なものであったと言われる。一五一八年から一五三〇年の間大法官であったピエモンテ人メルクリーノ・ダ・ガティナーラ Mercurino da Gattinara のもとと皇帝の外交体制が整えられ、その体制は皇帝の治世中変えられることはなかった。皇帝は重要な外交上の決断を必ず自ら下したが、日常的な業務はすべてガティナーラの手を通してなされていた。ガティナーラの死後外交担当を継承したのは、ガティナーラの側近であったフランシスコ・コンテ出身のニコラ・ベルノー・ド・グランヴェル Nicolas Perrenot de Granvelle であった。皇帝はアンダルシア人フランシスコ・デ・ロス・コボス Francisco de los Cobos にグランヴェルを補佐させた。一五三〇年以降皇帝は事実上二人の外務大臣を持ち、グランヴェルを帝国及びネーデルラント問題担当官に、そしてコボスをスペイン、イタリア問題担当官に任命した。

皇帝にとって最も大切かつ困難を伴った外交職はイングランドの大使職であったようである。スペインやブルゴーニュはイングランドと古くから心情的にまた商業上結びついていた。その上イングランドは両地域間の海上交通の要所であり、またフランス戦略の上から言っても決定的に重要な地であった。イングランドとの同盟は皇帝が手にしえる最強のカードであったらしい。

カール五世の最初のイングランド大使はフェルナンド時代からのエルネエ・司教ベルナルディーノ・デ・メサ Bernardino de Mesaであり、メサはイングランドとの同盟を確保するのに大いに尽力した。しかしこの同盟が締結されると、皇帝は年老いたメサをルイ・ド・プレ Louis de Præと交代したのであった。ブルゴーニュの高貴な若い軍人であったド・プレは北フランス侵略の連絡官として有用であるとの判断からであった。しかし実際はド・プレは辛抱強さに欠けており、またトーマス・ウルジー Thomas Wolsey との交渉力に於いても劣っていた。ド・プレはスペイン貴族ドン・イニゴ・デ・メンドサ Don Inigo de Mendoza と交代させられたが、交代に伴う駐在大使の不在期間には大使職はネーデルラントからの特別使節によって補われていた。ヘンリーやウルジーはネーデルラントの商業上の利欲に憤っていた。その上既にヘンリーの離婚問題が生じていたので、皇帝はキャサリンの同国人であるスペイン人のほうがブルゴーニュ人よりもイングランド大使として適していると判断したようである。しかしメンドサは大使館に定住しないばかりか、キャサリンの助けになることもなく、激しやすい彼は皇帝にイングランドへの侵略を促すばかりであった。スペイン人もブルゴーニュ人もイングランド大使として適格ではないと判断し、ガティナーラは皇帝の世襲地外の出身者であったシャピュイを大使に任命することを皇帝に進言したのであった。

一六世紀の帝国の駐在大使の仕事は他の国の大使の仕事と特に変わることはなかった。⁽⁸⁾ 当時の大使の仕事の第一は任国の情報の収集であった。大使は情報のネットワークを作り、賄賂を用い、また諜報機関を利用して情報の収集に努めた。第二の仕事はそのようにして集められた情報を調査、分析し、急送公文書の形に整えることであり、それは大使自らが行

う仕事であつた。第三はその急送公文書を本国に送付することであつたが、これにはいくつかの困難が伴つた。まず常に時間がかかること、経費がかかることそして書簡の内容の秘密が保持されにくいことであつた。駐在大使が情報収集活動を始めると同時に、ウルジーやガティナーはそれに対する対抗策をとつた。ウルジーたちは他国の大使の行動に不審を抱き、そして大使が彼らの指示に従わない時は大使の急使を止めさせ、急送公文書を開封した。大使達もそのようなリスクに対する防御策をとることを本国から指示されていた。急送公文書の送付に最も安全であると思われる方法をその状況に応じて選択すること、また暗号を用いて通信文を作成することが大使達に委ねられていたのであつた。急送公文書の送付方法としては次の三つが考えられた。①大使は本国政府の急使をできるだけ用いること。また帰国の旅につく大使の主人の従者や大使自身の職員に託することである。しかしこれは迅速性と安全性の確保はできても送付の事実が周知のものになってしまう危険性があるし、また人的不足の問題があつた。大使達は任国政府の外交囊 *Doctel* を用いることもできたが、それには安全面での問題があつた。②商人たちによる送付サービスを用いること。これは任国の外交囊より安全ではあるが、迅速性に欠けていた。③大使の本国に帰国する商人に送付を依頼するよう説得すること。これは内密に送付する最上の方法であつた。しかし以上のいかなる手段も絶対に安全といえるような方法ではなかつたことは確かである。

また以上のような任務の他にも駐在大使の仕事は一六世紀中に増加した。駐在大使の重要な仕事として国家間の交渉を行う任務が加わつたが、それはかつて特別大使に委ねられていたことであつた。一六世紀には駐在大使は特別大使以上に外交政策の立案に携わるようになった。その上駐在大使は任国に儀礼を示すことが求められ、大使は儀式の際本国の君主の代理として務めなければならなかつた。そしてまた駐在大使の心得として欠かせないことは、他国の使節との交際の際に大使の君主の尊厳を守ることであつた。

第三節 帝国大使シャピュイの経歴、使命、情報源、書簡について

シャピュイの人物像に関する研究は、マッティンリー⁽⁹⁾やリッツ J.G.Ritz⁽¹⁰⁾によってなされている。特にマッティンリーはシャピュイを一六世紀の外交官たちの中で重要な人物として評価した。二人の研究をもとにするとシャピュイの経歴また大使として受けた使命は以下の通りである。

ウスタツシュ・シャピュイは一四八九年頃サヴォワ Savoye 公国のアヌシー Annecy で、公証人であつたルイ・シャピュイ Louis Chapuy's の次男として生まれた。ウスタツシュ・シャピュイは一五〇七年十一月一〇日にサヴォワ唯一の大学トリノ Turin 大学に入学し、ローマ法と教会法の博士号を取得した。トリノ大学はヒューマニズム研究が盛んな大学で、シャピュイの後の友人となるエラスムス D.Erasmus もこの大学で学位を得たし、シャピュイが人文主義者になったのもトリノ大学時代のものである。下級聖職位を取得した後、一五一七年シャピュイはアヌシーに戻り、ジュネーヴ司教ジャン・ド・サヴォワ Jean de Savoie からジュネーヴ司教区の役人に任命された。スイス諸州の公式言語であつたラテン語に秀でていた彼は、司教代理としてジュネーヴの政治問題に関わるようになり、その後司教座聖堂参事会員に任命された。ジュネーヴ司教そしてサヴォワ公に仕えたのち、シャピュイはブルボン公 duc de Bourbon の大使としてグラナダにある皇帝カール五世の宮廷に赴いた。一五二七年五月六日ローマの掠奪の際にブルボン公が死んだ後、シャピュイは有給の顧問官として皇帝に仕えるようになった。そして一五二九年九月ガティナラとグランヴェルの推薦のもと、王の離婚問題が生じていたイングランドに神聖ローマ帝国大使として遣わされ、その後約一六年間在イングランド大使を務めたのであつた。一五四五年夏の大使辞職後、シャピュイはルーヴァン Louvain に引退し、一五四九年アヌシーに中等学校をそしてルーヴァンに大学学寮を創設した。一五五六年シャピュイはルーヴァンで死去した。

シャピュイがイングランドに大使として赴任する際、皇帝から与えられた使命は次の二つであった。イングランドとの和平を可能な限り保つこと、そしてイングランド王の離婚問題で王妃キャサリンの利益を守ることであった。⁽¹¹⁾ そのためシャピュイに、法律的能力を駆使して離婚訴訟が行われているローマ在住の皇帝の代理人に情報を提供し、そしてキャサリンのよき相談相手となることが求められた。皇帝がシャピュイを大使に任命した理由は、彼の持つ法律的学識とともに、聖職者であり冷静な人物であったことによる。皇帝はキャサリンの出身国スペインの者よりもサヴォワ人の方が冷静にこの離婚問題に対処できる、また教会人とはいえ世俗問題にも明るいシャピュイはイングランドの問題に柔軟に対応できると判断したらしい。一五二九年五月一九日大使としての信任状が出され、シャピュイは九月一日ロンドンに到着した。しかしマッティンリーによればイングランド駐在二年を経ずして、シャピュイはイングランドとの和平の困難を痛感し、それ以後キャサリンの利益を守ることを赴任目的の中心に置いたと言われる。⁽¹²⁾

帝国側がイングランドにおける最大の情報源と期待していたキャサリンとの自由な接触はシャピュイにとって容易なことではなかった。またヘンリー八世の顧問官たちは皇帝の大使との交際に慎重であったため、宮廷から情報を得ることはほとんど期待できなかった。しかしシャピュイは、今まで以上にイングランドの情報を皇帝に通信することが重要であると考えたらしい。シャピュイはイングランド内での議会による措置、神学的議論を把握することが、宮廷での動き、対外政策、軍事的準備の情報と並んで必須と考えたようである。シャピュイは情報システムを構築することに主眼を置き、前任者たち以上に情報収集に努めた。大使館の職員の数を増やし、イングランド駐在二〇年以上の経歴を持つキャサリンのかつての式武官スペイン人モントーヤ Montoya をはじめ、キャサリンの以前の使用人たちを雇用した。シャピュイはフランドルやブルゴーニュ出身の青年たちを六人ほど雇用し、英語を学ばせ、彼の代わりに宮廷にしばしば赴かせ、情報収集にあたらせた。またシャピュイはモントーヤの他にも二人の英語に堪能な秘書を常に彼に同行させた。その上シャピュイは五、六人のスパイを雇い、彼らを用いて宿屋の主人からロンドンを通過する外国人からの情報、トーマス・クロムウ

エル Thomas Cromwell の使用人から主人への訪問者名、またヘンリー八世の廷臣の馬丁から主人の馬の状態と、さまざまな情報を集めさせた。またシャピュイはロンドンにいるスペイン商人組合たちと接触するばかりか、ネーデルラントからの商人たちとも連絡をとり、金や武器の動きまたアントウェルペンに出入りするイングランドの代理業者たちについての情報を得た。マッティンリーによればこれら商人達からの情報は、スパイからの情報以上にシャピュイにとって有益であつたらしい。⁽¹³⁾

本稿で直接の史料として用いた *Spanish Letters*, vol. iv, part ii はガヤンゴス P. Gayangos により一八八二年編集されたものである。⁽¹⁴⁾ ガヤンゴスは彼の前任者ベルゲンロス G. A. Bergenroth の死により、カール五世時代のイングランドとスペインとの交渉に関わる史料の編纂を引き継いだ。ガヤンゴスはシマンカス Simancas、バルセロナ、マドリード、ブリュッセル、リール Lille の文書館以外にウィーンのハプスブルグ帝国の文書館にもカール五世の大使たちのオリジナル書簡があることを知った。そしてそのオリジナルを調査し、暗号解読し、英語翻訳して活字化した。ガヤンゴスは自ら集め、編纂した大使たちの書簡の中で、「Chapuy's の急送公文書に関する限りその内容に全翻訳を施した⁽¹⁵⁾」と述べている。⁽¹⁶⁾

シャピュイの書簡に表されたヘンリー八世の離婚問題の内容に関しては、その記述は非常に詳細で、離婚問題の経過を知る上で極めて貴重な史料であると言える。シャピュイから皇帝へのロンドンからの書簡は、シャピュイがロンドンに到着した一五二九年九月一日から始まっている。⁽¹⁷⁾ それは教皇特使カンペジッ Campeggio とウルジーによるロンドンの教皇特使法廷がヘンリーの結婚解消の訴えを審理未了のまま閉廷し、法廷がローマ教皇庁に引き上げられた一月ほど後のことであつた。シャピュイはヘンリー八世の死（一五四七年）の二年前までイングランドに滞在し、その間ヘンリー八世の数度の離婚、結婚やイングランド教会のローマ教皇庁からの離反、修道院解散といったイングランドに於ける大事件を眺め報告してきたのであつた。シャピュイが伝えるヘンリー八世の離婚問題の主な事項を時系列に沿って記すならば、王の離婚に関するイングランドとローマとの交渉、イングランド議会での離婚問題についての討論、ウルジーの失脚、キ

ヤサリンの置かれた悲惨な状態、初年度収入税上納禁止法の制定、聖職者の服従、カンタベリー大司教ウォーラム Warham の死、ヘンリー八世とフランソワ一世 François I とのブローニュ Boulogne 会談、トーマス・克蘭マー Thomas Crammer のカンタベリー大司教就任、上訴禁止法制定、ヘンリー八世のキャサリンとの離婚、ヘンリーとアン・ブーリン Anne Boleyn との結婚、王女エリザベス Elizabeth の誕生、王位継承法の発布、イングランドにおけるルター主義の浸透、国王至上法の発布、イングランドにおける暴動の気配、ロチェスター Rochester 司教ジョン・フィッシャー John Fisher とトーマス・モア Thomas More の処刑、キャサリンの死と埋葬、アンの処刑、ヘンリーのジェーン・シーモア Jane Seymour との結婚、修道院解散、イングランドと帝国との同盟締結交渉、ヘンリー八世自身の宗教改革に対する執着、恩寵の巡礼問題であり、ヘンリーの離婚問題のほとんど全般に関わることである。以下では上訴禁止法にしばって大使が見聞きし報告したことを具体的に見ていくことにしよう。

第二章 帝国大使の伝える上訴禁止法

第一節 上訴禁止法に対する評価

イングランド宗教改革に関する制定法の中で一五三四年の国王至上法 Act of Royal Supremacy の持つ重要性は周知のことである。国王至上法は「わが元首である国王およびこの国王を相続し、かつ継承する本王国の諸王は、アングリカーナ・エクレシアとよばれるイングランドの教会の地上に於ける唯一最高の首長 the only Supreme Head in Earth of the Church of England called Anglicana Ecclesia と解され、認められ、見なされるものとする⁽¹⁸⁾」と述べているが、現在では前年春に議会を通過した上訴禁止法⁽¹⁹⁾の方が、イングランドの主権国家理念を最も早く明確に定義したものであるとして注目される

ようになり、国王至上法はその確認として理解されることが多い。上訴禁止法はイングランド王国を帝国であると明示し、世俗の裁判ばかりでなく教会裁判に於いても最終的な決定権は国王にあることを定めた。具体的には死罪をも含む罰則規定を設けてイングランド国外の法廷（具体的には教皇庁）に直接上訴することを禁じたもので、ヘンリー八世の離婚問題が経過する中で生じてきた制定法である。

上訴禁止法の意義を強調したのはエルトン G.R.Elton である。エルトンは上訴禁止法の序文で用いられている Empire という語に注目し「この Empire は一つの政治的単位、外国の勢力から解放された自由な自主独立の国家、つまり主権国家を意味する⁽²⁰⁾」と主張する。またディキンズ A.G.Dickens は「イングランド宗教改革の全法の中で、一五三三年二月から三月にかけて通過したこの上訴禁止法は最も画期的なもの、その原則の提示に於いて最も明確なもの、ヘンリーの宗教改革に於いて最も中心的なもの、そしてそれはクロムウェルがその民を連れてルビコン川を渡らせようとした時、彼が手に握った幟であった⁽²¹⁾」としてこの法を評価している。しかし中世史家であるハリス G.I.Harris はこの語は中世でも使われていたが、限界を持ち続けたものであることを強調し中世との連続性を主張する⁽²²⁾。スカリスブリック J.J.Scarsbrick も「この Empire という語はここで登場し、イングランドの政治語彙に重要なものとして追加されたが、その後のどの公文書にも現れてこないの、ほとんど消滅してしまうためにデヴィューしたようなものである。そしてこの法はローマに対するイングランドの政策にとって直接の影響をほとんど与えることはなかった⁽²³⁾」と述べ、特にこの法のその後に与えた意義を評価しない。

またシャピユイの書簡研究関係で言えばフルードとマッティンリーがおり、フルードは *The Divorce of Catherine of Aragon* の序で上訴禁止法に関して次のように述べている。「上訴禁止法や国王至上法はイングランド国家の独立を宣言し、イングランド帝国内での外国の司教、君主、主権者の干渉を排したものである。……この力強い革命は議会の行為、法の断固たる強制により市民革命なしに成し遂げられたものである⁽²⁴⁾」と。一方マッティンリーは上訴禁止法制定をキャサ

リンの離婚問題の経過の中のひとつの出来事として述べており、特に上訴禁止法に注目しているわけではない。⁽²⁵⁾ 日本ではほとんどの研究者がこの上訴禁止法を革新的なものとして受け止めている。⁽²⁶⁾ 以上、見てきたように上訴禁止法に関するこれまでの議論は、いずれにせよ国制史的観点からなされることが多かった。本稿ではこの上訴禁止法案が議会で可決されていく間、帝国大使シャピュイがこの上訴禁止法に関する情報をどの程度把握していたのか、どのような視点からこの法に注目していたのかを彼の書簡の分析から具体的に探りたい。

第二節 帝国大使の伝える上訴禁止法

Spanish Letters に収録されているシャピュイから皇帝に宛てた書簡の中で、上訴禁止法を扱っている書簡はこの時期（一五三三年一月から六月）の全書簡一七通中七通である。本稿では上訴禁止法に関する記述が多い五通を紹介する。この法に最初に触れているのは一五三三年三月一五日の書簡である。シャピュイの書簡を示す前にヘンリーの離婚問題に関する一五三三年一月から同年三月一五日までのイングラント内の動きについて述べておきたい。一月ヘンリー八世はアン・ブーリンと密かに結婚をし、一月末にはアンの懐妊を知ったとみられる。ヘンリーは正嫡の後継者を持つためアンの結婚が正当であることを立証する必要があった。議会（いわゆる宗教改革議会）では一五二九年以来ヘンリーの離婚問題が議論されており、一五三二年からはトーマス・クロムウェルが政治的発言力を増してきた。一五三三年二月四日から開始された議会の第五会期で上訴禁止法案が議会に提出され、クロムウェルの影響下、四月の第一週にこの法案が議決されたのであった。

（１）シャピュイから皇帝に宛てた書簡 一五三三年三月一五日⁽²⁷⁾

「昨日と今日、議会で制定法に関する議論がなされました。その法はこの王国では教皇がいかなる権利も権威も司法権

も持つてはいないことを宣言するものであります。非常に妙なことと思った者も何人かおりました。それでも、誰もがこの法は成立するだろうと考えています。というのは王がそれを強く望んでおり、王は議會で（この法を）成立させる手段を既に講じています。もしも教皇がそれを阻止しようと願っているなら、私が（以前送った書簡の中で）陛下に申し上げているように、それには王妃の問題に早急に決着をつけること、またスコットランド王に金銭的援助をすること、そして教会の懲戒罰(censure)で（イングランドの）通商を妨害することしか道はないでしょう。そうでなければ、事態は本当に悪くなってしまうでしょう。」

この部分は一三段落中一〇段落目に書かれている。この書簡に記された内容は、順に以下の一〇項目である。①王がある司祭に王とアンとの結婚を支持する説教を行わせている話。②スコットランド問題のため（アンの兄弟である）ロッチフォード卿 Lord Rochford がフランスに派遣された話。③王とフランス王とが親密であること。④皇帝のボローニャからの出発やドイツ国内の混乱状態についての王の意見。⑤王の離婚問題に対する皇帝の態度への王の非難。⑥離婚訴訟に対する教皇の態度への王の不満。またかつての教皇たちのイングランド王に対する態度への不満。⑦フランスの富と権力への王の賞賛。⑧上訴禁止法の問題。⑨プロテスタント系ドイツ諸侯のイングランド王への支持を伝えるため、ドイツから使者が来英した話。⑩スコットランドの持つ戦艦の数。⑪教皇の姪とオルレアン公との結婚問題。

この書簡には上訴禁止法案が議會に提出されたことが示されているが、上訴禁止法に関してはずかしに記載されておらず、名称も出てこない。この書簡に於いては⑤と⑥の部分の記載が多く（全体の半分以上）王の離婚問題についての話題が中心であり、上訴禁止法に関する記述（⑧）もこの関連で述べられている。この法に関してシャピュイが注目しているのは、教皇がこのイングランドで権威や司法権を失うということであり、そのような結果を伴うことになるこの法の成立を王が強く望んでいることである。シャピュイはこの法の趣旨を既に把握していたと思われるが、まだこの時点ではこの法案の実効をイングランド王が本気で狙っているわけではない、むしろイングランド王と取引することにより成立を

阻止することが可能なものとして捉えていた。シャピュイは教皇がまず王妃の訴訟に判決を与えることで、この王側が企てた政策を回避できると考えていた。やはりシャピュイはこの法を王の離婚との関係で見いていたといえよう。しかしシャピュイがイングランドの通商の妨害という帝国にとっても経済的損失になるであろう手段をも考慮にいれていたことは、彼が当初からこの問題を軽視してはいなかったことを示すものとして興味深い。

(2) シャピュイから皇帝に宛てた書簡 一五三三年三月二日⁽²⁸⁾

ここでははつきりと上訴禁止法案が議会に提出されたことが述べられている。

「アン・ブーリンとの結婚式がイースター前かその直後に厳かに挙げられるだろうと言われています。……：……：イングランドの宮廷では王側であれ王妃側であれ、教皇は皇帝陛下を裏切るだろうとどの廷臣も公言しますが、特に（王の側近たちである）ノーフォーク公 the duke of Norfolk とサフォーク公 the duke of Suffolk は確信を持って断言しています。……：……：教皇は誰よりもまずこのこと（教皇が今まで王の離婚訴訟に判決を出さずにきたこと、またイングランド王が教皇の指示に従わずにイングランド国内で新しいカンタベリー大司教により王の離婚問題を終結せしめようという危険を警告されていたにも拘らず、カンタベリー大司教任命の教皇大勅書 bull をイングランドに急送したこと）を悔悟すべきであります。教皇はイングランドで自らの権威を確実に失うことになるでしょうから。そのことはキリスト教界にとつてはスキヤンダルに、そして王妃の訴訟にとつては損になりましょう。というのは議会に提出された法案の中には教皇の権威に反することも含まれており、それは次のような内容のものであります。「いかなる者もそれが世俗のことであれ、宗教的なことであれ、結婚に関するものであれ、どのような問題に関してもここイングランドからローマに上訴すべきではない」と。そしてそれは財産没収の罰や反乱罪による投獄の罰をもつて禁じられているのです。またこの法は将来のことに対して適用されるだけでなく、既に始められている訴訟に対してさえ効力を発揮するということであり、この法の条項は王妃の問題に直接当てはまるのであります。信じがたいことですが、「もし王妃が王妃の上訴に執着するならば、

王は王妃から寡婦産を奪ってしまふ（だろう）」と私は聞かされています。庶民院議員たちは諸々の理由を述べながら、教皇の権威に反するような法に同意することを拒み、正当な理由を述べてそれに勇ましく反対しています。最大の反対理由は、「もし教皇が自らに對してなされた侮辱に憤り、この王国を教会分離的 schismatic と宣言し、この王国を破門してイングランド人の生活の糧である毛織物貿易を妨害させようものなら、（イングランドで）何よりも恐ろしい暴動や内亂が生じるだろう」ということです。これに對し王側は「そのような危険はない。隣接する国々の君主たちも喜んで王が（教皇に對してする）脅しや行いに同調するだろうから」と主張しています。」

この部分はこの書簡の七段落中一段落目と二段落目に属し、分量も前より多くなっている。シャピュイが皇帝に宛てた多くの書簡から判断すると、外交官としての使命感の強かったシャピュイは皇帝に第一に報告すべきことと思っている内容を書簡の最初に書き、また量も多く記載する傾向があった。またシャピュイは大使の職にあつた一六年間のうち、はじめの一二年間は同一の暗号を用いていたことからしても、秘密保持のためシャピュイが送付のたびに記載方法を変えたとは考えにくい。つまり書簡が、重要な事項から順に記されていると考えるならば、前の書簡と比して位置（順番）が上がったことは、分量の増加とあわせてシャピュイが上訴禁止法問題をより重視することになったことのあらわれと理解できる。この書簡に記された内容は、順に以下の通りである。①王はアン・ブーリンとの結婚を公式に認めてもらうためカンタベリー大司教宛の教皇大勅書を待っているということ。また結婚に反対しているのはただロチェスター司教（のちに国王至上権を否認して処刑されたジョン・フィッツシャー）だけであるということ。②上訴禁止法の問題。③来英しているスコットランド人にシャピュイが接触し、皇帝への協力を促した話。④ロッチフォード卿が成果を上げることなくフランス宮廷から帰国したこと。⑤王がハンブルグとデンマークに送った使節たちが帰英したこと。⑥スコットランドが商品を積んだイングランド船を攻撃したこと。⑦シャピュイが未払いの給料の支払いを皇帝に要請したこと。

この書簡で注目すべきことは、議会で上訴禁止法案を通過させようというイングランド王やその側近たちの動向をシャ

ピユイがよく把握していることである。また上訴禁止法の内容、そして法案通過に反対するイングランド側の議員の態度や反対理由、それに対する王の説得内容もシャピユイがこの時期にはかなり把握していたことがここから読み取れる。シャピユイはもうこの時点に於いてはこの上訴禁止法を王妃の処遇に直接関わる問題としてかなり警戒していた。またイングランドでは教皇の権威失墜の危険性があるということ、そしてこれはキリスト教界にスキャンダルを生じさせるものであるということもシャピユイは教皇に対し警告を発しているのである。

(3) シャピユイから皇帝に宛てた書簡 一五三三年四月一〇日⁽²⁹⁾

「今の議会に出席している議員達は、王が王自身をまた王国をも危険に晒すようなことをしていることを重く受け止めて、王に対しこれを辞めるようにしつこく迫ったのですが、その甲斐はありません。王は議員たちに教皇の権威に反する提議に同意させ、(そのような法案を議会で) 通過させるようにと、断固たる意志でもって強いています。この法案の内容は、「どのような訴訟も、たとえそれが結婚の訴訟であろうともイングランド内で審理されるべし。いかなる者も決して教皇に上訴してはならず、もし敢えて上訴しようとするならば大逆罪に問われるべし。また誰か王国外へ上訴をした者がこの王国に(教皇からの) 破門や聖務執行停止令 interdict を招くような事があれば、その者は直ちに捕らえられ、恥ずべき死へと送られるべし」というものであります。(考えられるように) この計略は専ら王妃に向けられているのであります。」

この部分はこの書簡の筆頭に置かれており、書簡に記された内容は、順に以下の通りである。①上訴禁止法について。②王とアンとの結婚がイースター直後に行われるとのこと。それを王妃に知らせるということ。王妃は王妃の称号を剥奪され王の監視下に置かれること。③王妃の利益を守ろうとしているロチェスター司教が収監されたこと。④(こうなった以上は) イングランドに対する戦争をおこすようにとシャピユイが皇帝に懇願していること。⑤シャピユイによるアンに対する批判。(神聖ローマ帝国にとっての) 最大の困難はフランス王の帝国に対する(軍事的) 攻撃であろうが、現在の

ところフランス王にはその意志はなさそうだということ。またイングランド王はスイスの援助なくしては何も行動できないだろうということ。⑥（何にもまして）王妃の利益を守るべきであるというシャピュイの意見。⑦スコットランドから帰英した教皇大使の話。スコットランドはイングランドとの和戦両方に備えていること。

イングランドに於けるヘンリー八世の離婚問題は急速に進展し、一五三三年四月二日にはトーマス・克蘭マーがカンタベリー大司教に就任し、四月の第一週には上訴禁止法案が可決された。四月一日には克蘭マーはヘンリー八世の離婚訴訟の判決を自らに委ねるよう王に願い、議会を通過したばかりの上訴禁止法によりそれが認められた。四月一二日の議会でヘンリーとキャサリンとの結婚は無効であることが決定され、一三日にアンは宮廷で王妃として公に宣言されたのであった。

このように事態が進展する中でこの書簡が書かれたのであるが、この書簡には既にシャピュイが上訴禁止法案の議会通過、そして上訴禁止法が死罪をも含む罰則規定を伴う内容のものであることを法制定後数日を経ずして察知していたことが示されている。この書簡では、上訴禁止法に関する記述のすぐ後に王とアンとの結婚や王妃に対する苛酷な扱いが述べられている②。またこの書簡全体は、王妃の利益をなんとしても守るべきであるという考えに貫かれている。このようなコンテキストから考えると、王妃の置かれた状況を大きく転換させる事態として上訴禁止法を重視したシャピュイは、上訴禁止法成立をトップニュースに持ってきたと理解できる。王妃がローマに上訴することを禁じられ、今までの王妃の上訴も王国の法を犯す行為としてみなされる恐れを何にもまして最初に皇帝に伝えるため、この部分が書簡の筆頭に置かれたのであろう。そして④で示したようにこの書簡の中で、シャピュイはいまや皇帝にイングランドに対する戦争をおこすよう懇願している。これはそれが記されているコンテキストからみると、上訴禁止法案可決に直接対応してとるべき行動というよりも、王側の王妃に対する諸々の厳しい措置や王のアンとの結婚という事態に対応してシャピュイが具申している方策であると考えられる。シャピュイのそのような感情から判断しても、この時期シャピュイはこの上訴禁止法を専

ら王妃の処遇に関するものとして捉えていたといえよう。

(4) シャピピュイから皇帝に宛てた書簡 一五三三年四月一五日⁽³⁰⁾

この書簡には上訴禁止法に関する記述が二箇所見られる。

(i) 「私(シャピピュイ)が王(ヘンリー)を訪ねてきた理由、また帝国大使ばかりでなく世のいと弱き者の意見を聞くのが王の義務であるということを私が述べると、王はしぶしぶそれまでの態度を改め、答え始めました。「二人の枢機卿(教皇特使カンペジョやヨーク枢機卿ウルジー)に(王の離婚訴訟に関する)任務が(ローマに移管される前に)委託されたことは余自らが申し出たことではあるが、教皇がかつてした約束に基づくものである。教皇は余にその訴訟をここ(イングラント)から決して(ローマに)戻すことはしないと約束していたのである。しかし教皇はかつての委託を取り下げたのである。双方にとって公平な場所でその訴訟を審理させ、判決を下させたらどうかという提案についても同意しない。というのは余はイングラントで判決を下させるつもりだからである。王妃の上訴はそれがこの王国の法に基づく場合にのみ余はそれに同意する。最近上訴禁止法案が議会に提出されており、それに王妃も一臣民として従う義務があるからである」これに対して私は言いました。「法は将来のことに関するものであり、遡及するものではありません。そして王妃に関しては、もし王妃が王の正式な妻であるとすれば、確かに臣民であります。この前提に立てば法また上訴に関しては議論の余地はありません。しかし、王が主張されるようにもし王妃(キャサリン)が王の妻でないのならば、王妃は臣民とは呼ばれません。というのは、王妃はただ結婚されたためにここ(イングラント)に住んでおられるのであり、もし王が王妃のことを自分とは関係がないと言われるのなら王妃は王の臣民ではなくなるからです。そうなればイングラントの慣習法に基づいて、王妃は王妃の訴訟を故国スペインで行う権利を主張されるでしょう。」

この部分は、この書簡の一五段落中五段落目に属し、比較的長い記述であり、王とのやり取りを正確に伝えるために長くなっていると考えられる。この部分からはシャピピュイが法的知識を駆使して、王妃のための議論を王と戦わせていたこ

とが生々しく窺えて、興味深い。

この書簡に記された内容は、順に以下の通りである。①シャピュイが王妃に対する扱いについて抗議をするため王を訪ねたときの状況。②シャピュイによる王への抗議。王の離婚に対する非難。③王との（後継者問題についての）議論。王がシャピュイは皇帝からの特命を受けて訪ねたのかどうか知りたがったこと。それに対しシャピュイが自分は皇帝から皇帝と王との友好関係を保つという任務、なによりも王妃の利益を守るという任務を与えられていると回答したこと。また王が皇帝は王に干渉する権利はない、王の権威でその法（上訴禁止法）を通すつもりであると述べたこと。シャピュイがイングランドでの訴訟終結は困難であると述べたこと。王妃が上訴禁止法の適用を受けるかどうかを巡る両者の議論。王がフランス王の助力を求めるつもりであると述べたこと。またスペイン人とフランドル人との通商について尋ねたこと。④ノーフォーク公が王妃キャサリンを訪ね、これ以上上訴をしないように説得しようとしたこと。王がキャサリンに対し王妃を称することを禁止したと告げたこと。そして王妃の収入が減らされたと説明したこと。⑤アンが既に王妃のように振舞っていること。⑥王が既に結婚の準備を整えていること。カンタベリー大司教を密かに任命したこと。⑦フランドル在のイングランド商人が王に戦争の可能性を尋ねたこと。フランドルでは皇帝の傘下にある商人たちが戦争に対する備えをしていること。⑧スコットランドとイングランドとの和平に関してフランスの果している役割が少ないこと。⑨フランス王がヘンリーとアンとの結婚を祝福していること。⑩王妃の称号が *the old widow princess* に変えられたが、王女メアリーはまだいかなる称号も与えられていないこと。⑪イングランドの人々が、この結婚に対する皇帝の意見を知りたがっていること。⑫王がローマに急使を送ったこと。

この書簡では、王妃に対する処遇についてシャピュイが王に抗議をしたことが筆頭に述べられており、また王の離婚問題に関する記述が九割以上を占めている。この上訴禁止法に関する記載もシャピュイの王への非難に続く議論（③）の中で取り上げられているが新しい情報はなく、このようなコンテキストからするとこの時期シャピュイの関心は専ら王妃の

問題であつたといえよう。但し帝国大使はこの時点に於いてはこの離婚問題が帝国の通商またイングランドとフランスやスコットランドとの関係に及ぼす影響にも神経を配っていたことがここから読み取れる。

(ii)「王はまさに今日ローマに急使を送りました。それは次のことを教皇に(弁明し)ほのめかすためでありましょう。議会で教皇に反対して行われたことは人々の懇願に基づくものであり王の本意ではないということ、そしてもし王の結婚が(議会で)承認されるとしても(もし教皇が離婚問題に関しヘンリーに誠意を見せるのなら)王はそれを全て取り消すつもりであるということ。王はその急使に自分の手紙以外を運ばせることを禁じました。本当のことがわかってしまうためです。皇帝陛下はこのような(イングランドの)事態を教皇に知らせ、(王の訴訟に)判決を下すように促がして下さい。」

この部分は書簡の最後に追伸の形で書かれたものである(12)。シャピュイのこのような推測が正しければ、王が教皇に対して、また王の(ローマでの離婚)訴訟の行方に対して上訴禁止法がもたらす影響を憂慮するという表向きの姿勢を示していたことがわかる。王にはまだこの時期、教皇と全面対決する意志はなかったようである。

(5) シャピュイから皇帝に宛てた書簡 一五三三年 五月一〇日³¹⁾

この書簡には上訴禁止法に関する記載が五箇所ある。

まずこの書簡の内容は、順に以下の通りである。①王妃のカンタベリー大司教法廷への召喚を巡り、王妃にも上訴禁止法が適用される恐れがあるだろうというシャピュイの懸念。②王妃が出頭しない理由。③シャピュイがイングランド内で皇帝に対する(軍事的)攻撃の気配を感じていること。④王妃の権利維持のためシャピュイが自らの意志で王に手紙を出したこと。⑤王の腹心クロムウェルを通してその手紙に対する王からの回答。⑥王の重臣達とシャピュイとの王の離婚訴訟を巡る議論。王の重臣達が皇帝のイングランドに対する姿勢を知りたがったこと。それに対してシャピュイが、皇帝は常にイングランド王や王国に友情を抱いており、王や王国の利益や名誉また安寧のため王の離婚問題に介入していると答

えたこと。カンタベリー大司教によるヘンリーの離婚訴訟の終結に対するシャピュイの反対論。王国内でその訴訟が終結されるべきであり上訴禁止法に逆らうべきではないとする（教会法学者であり、御下賜金係 Lord High Almoner of England である）フォックス博士 Dr. Fox による反論。皇帝がイングランド征服を計画しているという王国内で流布している噂。⑦王の結婚が行われたこと。⑧ノーフォーク公がフランスに派遣されたのは、（教皇とフランス王との間で行われる）ニース会談のためであらうというシャピュイの予測。⑨王がアンとの結婚に際し、イングランドの人民に財政的援助をするよう命令しているということ。アンの評判の低さ。⑩王がローマに人を派遣し、ローマからも（キリスト教界全体の）公会議のことでイングランドに人が送られたこと。

五月に入ると、五日にヘンリー八世はキャサリンのもとに王の代理を遣わし、キャサリン自身の権利を守るため、カンタベリー大司教法廷の前にキャサリンを召喚した。しかしキャサリンは教皇以外の者による判決を拒否し、出廷しようとはしなかった。

(i) 「私（シャピュイ）が先月八日付の皇帝の手紙を受け取ってすぐに王妃のところに行き、（皇帝から手紙がきたことを）伝えると王妃は非常に喜び、慰められたようでありました。皇帝が自分のことに関心を払ってくれていることを再認識したばかりではなく、王妃の心の平安の源であるとともにキリスト教界の平和の鍵である皇帝の繁栄を知って喜びました。王妃が上訴したり、抗議したり、あるいはカンタベリー大司教に嘆願したりすることは、議會を通過した先の法のために反乱罪となるのであり、大逆罪を犯した罰を科されるのであります。そして昇天祭の朝に離婚の判決を出すというカンタベリー大司教の決意を阻止したり、遅らせたりすることはできないことを悟って、王妃は上訴を断念したのであります。」

この記載は、二〇段落に分かれているこの書簡の筆頭に置かれているものである。シャピュイが王妃の置かれた状態を第一に皇帝に知らせようとしていることがここからいえる。そして上訴禁止法に関する記述も王妃についての報告の中で

簡単にふれられているだけであり(①)、シャピュイはここでも王妃にどんな影響があるかという視点を中心に上訴禁止法をみていたといえよう。

(ii)「私(シャピュイ)が見る限り、もし王妃が議会のこの法に従わなければ王は非常に喜び、(それを)王妃の扱いを悪くする口実にするでしょう。また(王妃が従わないような)折には王妃を裁くことになる貴族たちに王は王妃に対する有罪判決を出させ、前述の法で定められた罰を王妃に受けさせるかもしれません。そして貴族たちは巧みな企てに乗せられて判決を出すのではないか、そして王の要求を支持してしまうのではないかと心配します。また同じ理由から王妃は上訴するべきではないと(自ら)考えてしまうのではないかとと思っています。」

これは三段落目に記載されているものである。王妃がカンタベリー大司教法廷に出頭しないため、裁判に訴える権利を取り上げられ、王妃の(既になされている)上訴が取り消される恐れがあるということを述べた後(②)に記されている。シャピュイが王妃の(ローマへの)上訴また王妃の今後の処遇にとって、この上訴禁止法が障害となることを懸念していることが読み取られよう。

(iii)「私(シャピュイ)が(王妃の権利を守るため)自らの判断で王に宛てて書いた手紙の趣旨を、またその手紙の中で述べられている破門の問題を国王顧問会議 King's Privy Council⁽³²⁾に集まった王の重臣たちに理解させようとしてその概略を説明した時、(アン・ブーリンの父である)ウィルトシャー伯 the earl of Wiltshire は大変驚いて立ち上がり、苛立ち、つぎのように言いました。「この手紙は非常におかしい。この王国内の誰か、もしかしたら重要人物かもしれないが(キヤサリンを暗示していると思われる)、そのような者が書いたような手紙だ。この(様な内容の)手紙を書いた者は(その者の)身体も財産も先の法によって没収されることになるだろう」その法のことを伯は王の命令で私に知らせようとしていました。」

この記載は一〇段落目のもの(⑥)である。これは王妃のカンタベリー大司教法廷への召喚に対するシャピュイによる

非難に対して、またシャピユイが王妃の権利を擁護するため王に宛てて書いた手紙に対してウィルトシャー伯が示した反応である。シャピユイの書いた手紙を読み、王に近いウィルトシャー伯が上訴禁止法のことを持ち出すことで帝国側の動きを牽制しようとしたことがわかる。

(iv)「私(シャピユイ)は王に王や王の重臣たちが根拠としている法は有効ではないと話しました。そしてその理由をいくつか述べておきました。また例えその法が有効であっても王妃には適用されえないし、適用されるはずもない、その理由は話しきれないほどであると話しておきました。」

これは一一段落目に記載されている(⑥)。この記述はスペインやナポリの高位聖職者またパリ大学は王妃を擁護しているとシャピユイが王に述べた後に書かれている。シャピユイがローマ法などの権威をもち出して、自分の主張の正当性を王に訴えたことを意味している。

(v)「私(シャピユイ)が自らの権限で行えることを実行すると主張したので、何度も返答や反論が繰り返され、王の重臣たちは既に述べた(このイングランドを混乱に陥れかねない)ような迷惑を考慮してほしいと再度私に頼みました。遂に二人の判事 Judge (フォックス博士と教会法学者でウィンザー首席司祭であるサンプソン博士 Dr.Sampson) が例の法を犯さないようにとまじめくさって私に懇願しました。その法文の写しをウィルトシャー伯は腕に抱えており、それは大きな巻紙でした。」

これは一三段落目に書かれていること(⑥)である。これは国王顧問会議でのシャピユイと重臣たちとの議論の終わりの部分に出てくる記述である。王の重臣達が上訴禁止法を非常に重視し、これを帝国側への武器として用いるつもりであるとシャピユイが感じていたことがここに示されている。シャピユイがこの法文を実際に見たのかどうかはわからないが、彼がこの法に関して強く印象付けられたことは確かだろう。

以上 *Spanish Letters* 所収のシャピユイから皇帝に宛てた書簡の中でシャピユイが上訴禁止法について記述している箇所

を示してみた。⁽³³⁾これらの史料からどのようなことが言えるのであろうか。当初から予想されたことではあるが、第一にこの一五三三年一月から一五三三年六月までの書簡に於いてシャピュイが最も関心を持ち、皇帝に伝えたかったイングランドの情報の第一は王妃の権利が守られているか、王妃の処遇はどうなるのかということであった。それぞれの書簡に於ける上訴禁止法に関する記述は全体からするとわずかに過ぎず、また上訴禁止法の内容について言及された部分もそのコンテキストからするとこの王妃の問題との関連でのみ取り上げられている。第二にエルトンが指摘するEmpireという語はこれら一五三三年の帝国大使書簡の史料にはひとつも出てこないということである。シャピュイは上訴禁止法の趣旨を相当把握しており、その法文がどのように表現されているのかをかなり具体的に記しているにもかかわらず、この語に全く言及していない。⁽³⁴⁾シャピュイの報告は非常に詳細でまた量も多く、彼はイングランドの動きを十日に一度ぐらいの間隔で本国に通信している。EmpireやEmperorの語のイングランド的含意について、この時点で帝国に伝えるべき重要な情報とはシャピュイはみなしていなかったことが窺える。のちにイングランドの主権を画する重要な制定法とみなされるようになった上訴禁止法ではあるが、仮に一五三三年の時点で制定者側にその意図があったにせよ、制定当時は少なくとも大陸側には上訴禁止法に込められたEmpireの意図は伝わらなかったことは確かである。一五三二年二月一四日の皇帝に宛てた書簡の中に、ある博士がノーフォーク公に語った「結婚の裁判権はこの王国の皇帝emperorである王に属するのである」⁽³⁵⁾という一節をシャピュイは既に載せている。一五三三年以前から既にイングランド側がEmpireやEmperorという語を意図的に用いることがあったこと、そしてそれを帝国大使もすでに把握していたことをこの事実がよく示している。そうだとすれば、上訴禁止法に関する帝国大使としての関心の第一は、上訴禁止法がイングランドの主権主張宣言であるという理念的な面よりも、むしろ上訴禁止法が与える具体的な影響に関心が向けられたであろうことは当然予測されることであった。まさにこれと関連して第三に上訴禁止法がイングランド国内で、特に議員たちや聖職者たちに衝撃を与えたことをシャピュイは毛織物の取引に関すること以外は記載していないという点が挙げられる。⁽³⁶⁾実際当時、上訴禁止法がイ

ングランド人に与える第一の影響は通商問題であるとイングランド側でも考えられたのであろう。そして最後にシャピユイがこの時期に書簡の中で取り上げたイングランドの話題はほとんどがイングランドの対外問題であったということである。シャピユイの話題は王妃や王女の問題以外には①イングランドとフランスとの関係②イングランドとスコットランドとの関係③イングランドとフランドルとの通商問題④イングランドとドイツ諸侯との関係⑤教皇とフランス王とのニース会谈のことであった。外交使節であるシャピユイには当然のことかもしれないが、彼の視点はあくまでも神聖ローマ帝国人の国際的な視点であり、その点ではイングランドの *Empire* に込めた含意は特別新規なものとはシャピユイに理解されなかったのかもしれない。

第三節 皇帝の上訴禁止法に対する反応

シャピユイはこのように上訴禁止法を理解し、それをイングランドの情報として書簡で皇帝のもとに送ったのであるが、それを受け取った皇帝側の反応はどのようなものであったのであろうか。皇帝（顧問）会議で議論され、そのような皇帝がとった措置を *Spanish Letters* に収録された皇帝（顧問）会議の内容に関する文書、また *Letters and Papers* に収録された皇帝からローマ駐在大使への書簡二通から見ていきたい。

（1）皇帝（顧問）会議での議論⁽³⁷⁾

「バルセロナから出発したロドリゴ・ダヴァロス *Rodrigo Davalos* ⁽³⁸⁾ に宛てて書簡を送るためイングランドの結婚問題に関して皇帝とともに協議したこと。一五三三年五月末⁽³⁹⁾

王が王妃との結婚を無効にし、アナ・デ・ブーランス *Anna de Bulans* （アン・ブーリンのこと）と公に結婚したので、次のような点が考慮されるべし。一八年間王妃と明らかに結婚生活を送り、王位を継承すべき王女を得たのであるが、六

年前離婚へと進むためにカンペジヨとヨーク枢機卿にその離婚訴訟（の判決）を委ねるような事態を王は招いた。……： 皇帝は（ローマに）数人の者たちを送ったり、書簡を送ったりしてその問題（の決定）を教皇に委ねた。……また（皇帝と教皇との）ボローニャでの会談に於いても（それを教皇に委ねた）。その結果、王の結婚を阻止するために（イングランドに）教皇教書 *brief* が送られた。しかし王は決してそれに従おうとしないばかりか、キャサリンが王妃を称することを禁じた。（皇帝がどのような措置をとるべきかを検討するため）次のような諸点が（皇帝（顧問）会議で）提案された。①裁判による手段 ②軍隊による手段 ③裁判と軍隊による手段。しかしそれぞれ問題点がある。①は適当であるように思われる。審理は既に始まっており、この問題は宗教に関わる問題であり、良心に関することである。王妃キャサリンと王女メアリーの権利維持のためこの会議でいくつかのことが決定されなければならない。しかし二つ問題点がある。（１）王は判決に従おうとはしないだろう。特にイングランドの先の布告のことを考えると。（２）教皇はイングランド王のことに關して非常に冷淡で、ぐずぐずしている。王妃と王女はその訴訟手続きの間苦しむことになる。②の軍隊による手段は現在の状況を考えると危険である。王は（他国の）援助を受けるかもしれない。（軍事行動は）キリスト教界全体、特に帝国の領土を危険に晒すことになる。……皇帝は王妃に対し責任を負う立場にあるのだが、これは（皇帝の）私的な問題である。（公的な問題が考慮されなければならない）。……イングランド大使に書簡を送って、「王妃に対する義務を果たすようイングランド王に対して皇帝が強く訴える必要があるのだろうか？」と聞くべきか。シヤピュイは「アナ（アン・ブーリン）が王妃や王女を足蹴にするのではないか心配だ」と書いてきているからである。⁽⁴⁰⁾

この文書の「イングランドの先の布告」という表現が上訴禁止法をさしていると思われる。上訴禁止法はイングランド王側が教皇の判決に従わないという意志を明白に表したものととして皇帝（顧問）会議では受け止められていることが、ここからわかる。しかし大使の理解とは異なり、キャサリンの問題を皇帝の私的な問題と理解したことが重要である。皇帝（顧問）会議は結局、イングランドへの軍隊派遣というシヤピュイが要請した措置を採用することはなかった。

Letters and Papers の中では、この五月末の皇帝（顧問）会議の報告に続いて二通の皇帝書簡が載せられているが、はつきりとした日付は記されていない。以下にそれを紹介しよう。

(2) カール五世からローマ駐在大使への指示⁽⁴¹⁾

① 「王妃キャサリンの（ローマ駐在）顧問官や擁護者の集まりで審議に供するべく皇帝（顧問）会議で議論されたことを大使に告げる。迅速に裁判を行うことが最上の方法であると考える。聖務執行停止令は（教皇からイングランド王に対して与えられる）懲戒罰としては度を越えたものであり、それが下されないことを願っている。（というのは聖務執行停止令が下されても）イングランドの人々は聖務執行停止令を敢えて遵守しようとしないうし、（イングランドの）大部分の者は離婚に反対しており、聖務執行停止令によって被害を蒙るべきではない。そしてネーデルラントにいる余の人民（商人たち）も被害を受けるであろう。聖務執行停止令の下にある者は通商を許されないからである。」

この史料には、イングランド王国の大部分のものが王の離婚問題に反対し、イングランド人の生活の糧であるネーデルラントとの通商が損なわれることにイングランド人が納得しないだろうという皇帝の見解が示されている。この皇帝の指示からはシャピュイからもたらされた情報のうち（イングランド人は離婚に納得しないだろうという）皇帝にとり都合のよい情報のみに基づき、楽観的な判断が皇帝と皇帝（顧問）会議で下されたことがわかり興味深い。そしてまたこの書簡の内容から、皇帝（顧問）会議の議論をうけて、皇帝はシャピュイのイングランドへの軍事介入に対する要請を顧慮せず、戦争を回避する政策を採ったことがここから読み取られる。

② 「カール五世から（ローマ駐在帝国大使）シフエンテスCifuentesとロドリゴ・ダヴァロスへの指示⁽⁴²⁾」

「あなたがたはイングランド王の離婚についての情報を既に得ている。シフエンテスは王が教皇の譴責を無視して、教皇庁による王の離婚についての判決前にアンと結婚したという評判がローマで広まっているということについて書いてきた。同様の噂がフランスでも立ったのであるが、余はそのことを三日前イングランド駐在大使の手紙から確認するまでは

信じたくなかった。(イングリランド) 大使はさらにキャサリンが王妃を称することを禁じられたということ、またその他の詳細を付け加えて書いてきた。……ロドリゴはできるだけ早くローマに赴き、シフエントスとともに(離婚訴訟において)王妃を弁護する者たちと協議すべし。そして王妃の権利維持のための、また(王の)アン・ブーリンとの結婚を無効にするための最上の方法を考えるべし。既になされた決定(教皇に王の離婚訴訟の判決を早く下すように迫ること)を主張することが良いのか、それとも王妃の権利を回復させることが最良なのかどうか(話し合うべし)。そしてまた王に王の情婦を追いつかせるための方法、またできれば教皇庁から託されている(イングリランド)王国を王から取り上げる最上の方法を考えるべし。それはイングリランドの先の布告が、王とアン・ブーリンが聖務執行停止令にほとんど顧慮していないような恐れを抱かせるからである。」

この文書には以下のような内容が続く。皇帝は(教皇による)懲戒罰がイングリランドに科せられることは、スペインとフランドルとの通商が損なわれることを意味していると述べている。また皇帝は聖務執行停止令を一つの司教区または王の居住地にのみ限るようにすること、イングリランド駐在大使と協議して王妃や王女を守る方法を検討するように指示している。また教皇に対して伝えるべき皇帝の意向として、①判決を出すこと②(イングリランド王への罰として)世俗の武力(皇帝の軍事力)に訴える前に教皇自らが罰を科すことを考えること③キャサリンのイングリランドからの出国を回避させること④フランス王からイングリランド王が情婦と別れるように説得してもらうように教皇がフランス王に要請することを示している。

この上訴禁止法(イングリランドの先の布告)が重要視されるのは、この法により聖務執行停止令が王やアンによって顧慮されないだろうという恐れを皇帝が抱いているからである。皇帝はシャピュイや皇帝(顧問)会議と同じように、王妃や王女の権威の維持や彼らの処遇に大変気を配っている。しかし皇帝の第一の懸念は、聖務執行停止令や懲戒罰によってスペインとフランドルとの通商が損なわれることである。ここでも皇帝はあくまでも戦争を回避したいという意志を持

っていたことが読み取れる。そしてこの書簡には、イングランドに対する今までの対応を変えるべきであるという皇帝の指示が示されている。それは直接にはイングランド王の結婚の事実そして王妃キャサリンが王妃の称号を剥奪されたということに起因し、上訴禁止法制定によってそれが決定づけられたといえよう。またこの皇帝の書簡の中では、皇帝がシャピュイの書簡からイングランド王の結婚の事実を確認し、それにより皇帝の指示を決定したということが明らかにされている。この記述から皇帝が最終的な事実確認の権威付け手段としてシャピュイの伝達を利用し、その点でシャピュイを重んじていたと考えるのもよいだろう。しかしながら皇帝は、シャピュイのもたらす情報のうち、自身の判断に都合の良いものを選択して受け入れていたという点に留意すべきである。

王妃キャサリンの利益を守るといふシャピュイの使命を考えると当然のことであるが、シャピュイにとってこの上訴禁止法は、王妃の処遇をめぐる問題以外にイングランドに於いて現実に大きな作用を及ぼしたものであったとは思われない。一五二九年以来イングランド大使を務め、諸々の対ローマ政策が案出されるのを眺めてきたシャピュイには、この上訴禁止法がそれまでとは異なったローマとの断絶を示すものとしては捉えられなかったのではないだろうか。シャピュイはこの法の制定をキリスト教界におけるスキャンダル、王妃にとっての損害として捉えていた。シャピュイのそのような捉え方はまた当時、議会での反論を別にすれば、上訴禁止法制定がイングランド社会において特に大きな抵抗運動を生じさせはしなかったことをも語っているのかもしれない。同時期にイングランドに駐在していたヴェネチア大使もこの上訴禁止法を特に重要問題として取り上げてはならず、イングランド王の離婚問題に於けるひとつの出来事として本国に伝えているにすぎない。⁽⁴⁾

皇帝と皇帝（顧問）会議がイングランドのこの離婚問題に神経を尖らせていたのは明らかであるし、シャピュイが伝えたこの上訴禁止法にかなり注目していたこともこの史料から読み取れる。しかし、皇帝が第一に懸念したのはこの法によりスペインとフランドルとの通商が損なわれるのでないかという経済的な問題であり、また教皇の権威が脅かされてキリ

スト教界の平和が乱されるのではないかという問題であった。皇帝はこの法により教皇の權威が損なわれることを憂慮しても、イングランドで教皇權が排除されるとまでは認識していなかったようである。シャピュイと皇帝や皇帝の顧問官の上訴禁止法に対する関心はキャサリンの離婚訴訟に対する関心、経済的問題、教皇や皇帝の威信維持以上のものは示されていない。彼らにはこの法がイングランドの国制を大きく変えるものとの認識はほとんどされていなかったとこれらの史料から言えるであろう。

おわりに

シャピュイが上訴禁止法をどのように受け止めて皇帝にイングランドの情報として報告したのか、またシャピュイの書簡を受け取った後、皇帝側がどのような反応を示したのかを見てきた。シャピュイの書簡はこれまで王の離婚問題の事実に関する事柄を明らかにするという視点だけでとりあげられてきた。イングランド内に残された史料ではわからなかった、イングランド内で何が起こったのかに関する事実を明らかにしたり、事実の確認をするという観点で用いられるにすぎなかった。しかし本稿では事実を明らかにすることよりも、王の離婚問題が、外国からはどのように見られていたのかという視点を重視し、*Spanish Letters and Papers*に含まれている帝国大使の書簡、皇帝の書簡をそのコンテキストや全体の内容、置かれた位置なども含め検討した。当時イングランドに赴任した帝国大使がイングランド内の出来事のどのような点に注目していたのか、何を本国に伝えることが重要とと思っていたのか、そのような外からの視点を探るのにこれらの史料が役立つことを明らかにし得たと考える。

皇帝側は概してシャピュイの通信の内容を重んじていたようである。それはシャピュイの書簡中に示された情報の内容とシャピュイの書簡を受け取ったあと皇帝や皇帝（顧問）会議で取り上げられた問題の内容とがほぼ一致しているからで

ある。けれども皇帝や皇帝（顧問）会議の政策はシャピュイの要請とは大きく異なっていた。シャピュイが皇帝にイングランドに対する戦争をおこすよう懇願したことは決して受け入れられることはなかった。皇帝ははっきりとそれを拒絶している。⁽⁴⁵⁾ また皇帝はイングランドの通商を妨害することをも望まなかった。皇帝側の政策はあくまでもイングランドとの摩擦をできるだけ避けること、そしてそれを妨げない範囲でキャサリンを擁護する事であった。それはまたシャピュイがイングランドに遣わされる時に皇帝から与えられた使命と一致するものであった。

シャピュイの書簡と皇帝側の政策を見ていくと、そこに帝国大使シャピュイの果たした役割と彼の示した限界が見えてくる。当時の駐在大使の第一の役目は情報をできるだけ集め、それを処理、選択して急送公文書として本国に送付することであった。一六世紀の他の帝国大使の書簡に比べ、シャピュイの書簡は送付回数もさることながら分量が非常に多いことからみると、シャピュイはその任務を十分果たしたと言えよう。またシャピュイはキャサリンを守るという使命に対しても活発な活動を行っていることは明らかである。これらの活動を通じてシャピュイがもたらした情報は、大使としての使命に適う情報という制約はあるものの、同時代のイングランド国内の視点のみからでは決して見えてこない部分を含んでいる。イングランドの外はこの時期イングランドをどう見ていたのか、この点を明らかにすることでヘンリー八世の離婚問題の解釈はより豊かなものとなることと信じる。

本稿では帝国大使シャピュイの書簡についての分析だけで終わってしまった。複雑な国際関係の中におかれていた当時のイングランドの情報がどのように伝えられ、またその情報が当時の人々の目にどう映ったのかを考察するには、在イングランド・ヴェネツィア大使の書簡や在ローマ・イングランド大使の書簡の詳しい分析もすべきであるが、それは稿を改めて考察したい。

- (1) 一五三〇年代のヘンリー八世の離婚問題に関するイングランド国内の動きやイングランドの政策に関する研究は数多いが、その中で特に以下のものを挙げておきたい。A. F. Pollard, *Henry VIII*, London, 1951; G.R.Elton, *England under the Tudors*, London, 1956, rep., 1992; *idem*, *Policy and Police: the Enforcement of the Reformation in the Age of Thomas Cromwell*, Cambridge, 1972; A.J.Dickens, *Thomas Cromwell and the English Reformation*, London, 1959; P. Hughes, *The Reformation in England*, New York, 1954; J.J.Scarisbrick, *Henry VIII*, London, 1968; *idem*, *The Reformation and the English People*, Oxford, 1984; C.Haigh, *The English Reformation*, Cambridge, 1983; *idem*, *The English Reformation Revised*, Cambridge, 1987; R.O' day, *The Debate on the English Reformation*, London, 1986.
- (2) G.Mattingly, *Renaissance Diplomacy*, New York, 1955, pp.51-188. また Mattingly はこの書の中で常駐外交制度を受容した政府がいかにして新しい外交を実践するようになったかを調べ、駐在大使として選ばれた者たちがした経験と彼らの活動を記述した。
- (3) G.Mattingly, *Eustache Chapuys and Spanish diplomacy in England (1488-1536) : A Study in the Development of Resident Embassies*. Ph.D.diss., Univ. of Harvard, 1935.
- (4) G.Mattingly, *Catherine of Aragon*, New York, 1960.

- (5) L.MacMahon, *The Ambassadors of Henry VIII*, Ph. D. diss., Univ. of Kent, 1999, p. 288. またマクマーホンはこの博士論文の中で大使たちの出自を聖職者、俗人貴族やジェントリ、商人といった三つのカテゴリーに分類して考察し、独自の才能や能力を備えているこれらのグループがそれぞれ異なったタイプ的外交職へと振り分けられたことを明らかにした。そして外交職に就くことが各々の身分にとってどのような意味を持っていたのかを考察した。
- (6) J. A. Froude, *The Divorce of Catherine of Aragon*, 1891, rep., 1970, London, pp.229-242.
- (7) G.Mattingly, *Renaissance Diplomacy*, p.121.
- (8) 十六世紀の大使の仕事に関しては主にG.Mattinglyによる。G. Mattingly, *Renaissance Diplomacy*, pp.229-242. ; *idem*, *Eustache Chapuys and Spanish diplomacy in England (1488-1536)* pp.194-218.
- (9) G.Mattingly, *Eustache Chapuys and Spanish diplomacy in England (1488-1536)*, pp.2-91.; *idem*, "A Humanist Ambassador", *Journal of Modern History*, vol. 4, 1932, pp. 176-185. Mattinglyはこの後者の論文の中でヒューマニストとしてのシヤピュイを論じ、シヤピュイの情報源をも明らかにしている。
- (10) J.-G.Ritz, "Le Savoyard Eustache Chapuis", *Cahier d'Histoire*, vol. 11, 1966, pp. 163-175. Ritz はシヤピュイの経歴、皇帝から受けた使命またシヤピュイの大使としての役

割の概略を示している。Riz は彼の属するリヨン大学図書館に残されていたシャピュイから皇帝に宛てた八四通の書簡（一五二九年から一五三三年まで）の写しを偶然見つけたことにより、シャピュイの研究を始めたと述べている。なおシャピュイの生年に関する史料は現存していないが、一九世紀末まで残されていた墓碑から推定すると、シャピュイの生年は一四八九年らしい。

(11) *Spanish Letters*, vol. iv, part ii, p. 639, Kaiserlich und Königlich Haus-Hof-und Staats Arch. Wien. Rep. P. Fasc. c.228, no. 24. (但しオリジナルは未見。以下同様)

(12) G.Matingly, *Renaissance Diplomacy*, p.179.

(13) *Ibid.*, p.234. 但しマッティンリーは、商人達からの情報でシャピュイにとってより有益であった理由には言及していない。

(14) シャピュイのオリジナル書簡は現在ウィーンの文書館 Kaiserlich und Königlich Haus- Hof- und Staats Arch. (以下 K.u.K.Haus- Hof- u.Staats Arch.と略す) に保管されている。*Spanish Letters* の編者ガヤンゴスによると、シャピュイの書簡は非常に価値があり興味深いものではあるが、いくつかの欠陥を持っている。まず英語を理解したり話したり出来なかったシャピュイは、ヘンリーの廷臣達や顧問官達と話をする時にはラテン語を用い、書簡をフランス語で書いた。シャピュイの急送公文書はほとんど自筆で書かれているが、暗号が非常に多く使われている。シャピュイは

いつも正しいフランス語を用いたわけではないし、書簡の受け手であるブリュッセルの書記達はしばしば暗号解説にミスを重ねたので、彼の文書は時には不明瞭なものになってしまった。フルールス Fleurus の戦い（一七九四年）の後、ウィーンに帝国国家文書が移されるに際し、文書館の書記たちによって保存のためシャピュイの書簡の写しが取られ、そしてその未完の写しはそのオリジナルと同様、今はウィーンに保存されている。写しのみが保存されている場合もある。またオリジナルに日付や裏書がなされていないものもいくつか見られる。P.Gayangos, *Spanish Letters*, vol.iv, part ii (1531-1533), London, 1882, rep., 1969, Introduction, pp. 26-27. 筆者はシャピュイのオリジナルの史料を参照しようとしたが、入手できなかった。

(15) P.Gayangos, *Ibid.*, p.28. *Spanish Letters* のシリーズは補遺二巻を含める十五巻からなっており、一八六二年から一九五四年にかけて出版されたものである。

(16) 本稿で補助として用いた *Letters & Papers* vol. iv, arranged and catalogued by James Gairdener, London, 1882, rep., 1965. はヘンリー八世の全統治期間である一五〇九年から一五四七年までに出版されたイングランド国内外の文書を集めたものである。これは一八六二年から一九三二年にかけて Her Majesty's Stationery Office から Mr.Brewer と Dr.James Gairdener の編集、指導の下に出版されたものである。そして The Public Record Office (かつての the

State Paper Office), the British Museum, オックスフォードとケンブリッジの諸図書館そして他の公共図書館に所蔵されているヘンリー八世統治に関する全国務文書と通信文(書状)の要約を含んでおり、BurnetやStyrpe等の手によって活字化されたものである。エルトンによると一九世紀イギリスでは、外国の第一級の文書保管所(特にヴェネチアの文書館、シマンカス、ブリュッセル、ウィーンにあるハプスブルグ帝国の文書館)でイングランドに関する文書を探す努力がなされ、多くの書簡が発見された。それらは、国内篇と外国篇にわけることなく編纂されていた当時の*Letters & Papers*の中にとり入れられた。G.R.Elton, *The Practice of History*, London, 1987, p. 90.

(17) *Spanish Letters*, vol. iv, part ii, p. 189, K.u.K.Haus- Hof- u.Staats Arch. Wien. Rep. p. Fasc. c225, No.16.

(18) *The Statutes of the Realm*, 25 Henry VIII, vol. iii, 1534, c.1. これは大野真弓の訳を一部変更して私訳した。大野真弓「イギリス宗教改革と絶対主義——ヘンリー八世の国王至上法」『横浜市立大学論叢人文科学』一〇巻二号、一九六二年、三頁

(19) 上訴禁止法 *The Statutes of the Realm*, 24 Henry VIII, vol.iii, 1533, c. 12. は「そもそも種々さまざまな古い権威ある歴史書や年代記によって明らかに宣言され、そして示されたことであるが、このイングランド王国はインパイアー(エンパイアー)であり this Realme of England is an

Empire、そのように世界の中で受け入れられてきたのである。このインパイアーは至上の長である国王によって統治され、その国王は帝冠 Imperiale Crowne の尊厳と王の威容を呈するものである」(私訳) という有名な書き出しで始まる。(本稿は *The Statutes of the Realm*, William s. Hein & Co., New York, 1993を用いた。) しばしば指摘されるようにこの上訴禁止法の中で特に注目されるものはその序文の「このイングランド王国がEmpire (Empire) である」という表現である。これの解釈を巡って論争がなされ、その代表的なものが、エルトンとハリスの数回にわたる論戦であろう。この法はヘンリーが離婚訴訟を進めていく過程の中で、またそれに対するローマ側の反応の中で生じて来た法であるのだが、「イギリス憲政史上殊に一六世紀中最も重要な法令である (G.R.Elton, *England under the Tudors*, London, 1956, rep., 1992, p. 161)」とまで言われた。

(20) G.R.Elton, *Ibid.*, p.162.

エルトンはまた同所で次のように述べている。「この法(上訴禁止法)は、こうして以下のことを宣言した。即ちイングランドは一つの独立した国stateであり、その全領域にわたり主権を有するものである。その国は、聖界諸事項での最高首長であり、世俗の王であり、全能の神から付与された全権、この王国に住む全人民と臣民に対して正義を与え、正義をもたらす完全なる力、卓越性、権威、大権、そして司法権を有して全権を所有している一人の支配者に

よって支配されている。この支配者はこの帝国 Empire の一部もしくはこの機構の一部とも言うべきものである。それは一方では聖職者と平信徒によつて構成された政治体 body politic もしくは国家 nation であり、この法が示しているように、その各々（の構成員）は王国外からの干渉もなく、その王国の聖界、俗界に於いてこの王の下で、正義を行うように認められているのである。」

(21) G.Dickens, *op.cit.*, p.55.

(22) P. Williams and G.L.Harriss, "A Revolution in Tudor History", *Past and Present*, no.25, 1963, p.9.

(23) J.J. Scarisbrick, *Henry VIII*, p. 316.

(24) J.A. Froude, *The Divorce of Catherine of Aragon*, pp. 10-11.

(25) G.Mattingly, *Catherine of Aragon*, p. 365.

(26) 大野真弓は「イギリス宗教改革と絶対主義——ヘンリー八世の国王至上法」の十七頁でローマとの断絶の志向性、もしくは兆候は、既に一五三二年の「初年度収入税禁止法」「聖職者の服従」の中に読み取れ、ヘンリー八世がローマ教会からの自立への方向に踏み切ったのは一五三二年頃としている。栗山義信は「上訴禁止法に関する一考察」『岐阜大学研究報告 人文科学』一一巻一号、一九六二年、六〇頁の中で「ローマとの断絶が初めて決定的となり、ヘンリー八世が「信仰の擁護者」の称号を教皇から与えられたあの両者の友好関係に終止符を打つに至ったのは一五三

三年の「上訴禁止法」によるのではないだろうか」と述べており、熊田淳美は「イギリス初期絶対王政下の議会と官僚」『西洋史学』五七号、一九六三年、三二頁で「上告禁止令は正しく中世的な国家観とローマ教会の支配の脱却の上に立っており、それが国王を唯一の支配の頂点とする国民国家の宣言を意図したことは明らかである」と語っている。越智武臣は『近代英国の起源』ミネルヴァ書房、一九六六年、三三頁で「いったいローマとの決裂は、正確にはいつ訪れたのであろうか。越えて三三年春、我々はここに重要な法令を持つことになる。史上「上告禁止法」と言われるものがそれである」と述べ、川本宏夫は「十六世紀イギリス宗教改革における上訴禁止法について」『関西学院大学人文論究』一二号、一九六一・一九六二年、九二頁で、「この（上訴禁止法の）法令の発布はイギリス宗教改革の過程にあつては、教皇権の徹底的消滅への議会でとられた第一段階であつて、その序文には、イギリス宗教改革の基本原則が含まれている」と記している。佐藤哲典は「本法（上訴禁止法）序文は、中世以来用いられてきた極めて伝統的な用語を用いてはいるが、その用語の意味内容を変更することによって、中世のカトリック教會的、普遍的エンパイア理念そのものを否定し、イングランドの新しい国家体制を明示したといひ得る」と述べている。「ヘンリー八世治下におけるイングランド国教會の成立過程とその特質について（2）」『立教高等学校研究紀要』一六号、

一九八五年、一〇〇頁。また近藤和彦は「この（上訴禁止法）法文は、イングランド王国およびイングランド教会は、神聖ローマ帝国やローマ教皇の権威に負けず劣らぬ主権と実体をもつ政治社会であると宣明し、それを他の政体や主権が承認するように求めた（ものである）」と述べている。『長い一八世紀のイギリス』山川出版社、二〇〇二年、二七頁。

(27) *Spanish Letters*, vol. iv, part ii, pp. 618-624. no. 1056, K.u. K. Haus-Hof-u. Staats. Arch. c. 228, no. 18. このオリジナルは自筆で一〇頁に亘ってフランス語で書かれている。この書簡は四月七日に皇帝の元に届けられたことが裏書されている。

(28) *Spanish Letters*, vol. iv, part ii, pp. 625-628, no. 1057, K.u. K. Haus-Hof-u. Staats. Arch. c. 228, no. 20. このオリジナルは自筆で六頁に亘ってフランス語で書かれている。この書簡は五月二五日に皇帝の元に届けられたことが裏書されている。この書簡だけ遅れて届けられた理由は不明である。

(29) *Spanish Letters*, vol. iv, part ii, pp. 628-632, no. 1058, K.u. K. Haus-Hof-u. Staats. Arch. c. 228, no. 21. このオリジナルは自筆で七頁に亘ってフランス語で書かれている。この書簡は四月二九日に皇帝の元に届けられたことが裏書されている。

(30) *Spanish Letters*, vol. iv, part ii, pp. 635-645, no. 1061, K.u.

K. Haus-Hof-u. Staats. Arch. c. 228, no. 24. このオリジナルは自筆で一四頁に亘ってフランス語で書かれている。この書簡は五月一二日に皇帝の元に届けられたことが裏書されている。

(31) *Spanish Letters*, iv, part ii, pp. 666-676, no. 1072, K.u. K. Haus-Hof-u. Staats. Arch. c. 228, no. 29. このオリジナルは自筆で一〇頁に亘ってフランス語で書かれている。この書簡は五月二五日に皇帝の元に届けられたことが裏書されている。

(32) King's Privy council は通常枢密院と訳すが、ヘンリー八世の時代には時期尚早なので、ここでは国王顧問会議と訳す。なおシャピュイの書簡によると、この国王顧問会議に出席したのは、「ウィルトシャー伯、エセックス伯 the earl of Essex、ロッチフォード卿、大蔵卿フィッツウイリアム the Treasurer (Fitzwilliam)、財務官クロムウェル comptroller Cromwell、二人のイングランドの主席判事であるサン普森博士とフォックス博士等」である。ノーフォーク公とサフォーク公はロンドン不在でこの会議に欠席している。 *Spanish Letters*, vol. iv, part ii, p. 669, no. 1072, K.u. K. Haus-Hof-u. Staats. Arch. c. 228, no. 29.

(33) *Spanish Letters* には、シャピュイの上訴禁止法に関する記述が含まれている書簡が本文中に挙げた(1)から(5)までのほかに二通載せられている。

(6) シャピュイから皇帝に宛てた書簡 一五三三年五

月一八日

「王の顧問官たちは、私（シャピュイ）の出した手紙への返事を三日以内にすると言っていましたが遅れています。……先週の火曜日食事のあと、王の顧問官たちを訪ねると彼らは数え切れないほどの理由をあげて、私を説き伏せようとしてました。（イングランドの）先の法のため、また私の権限不足のためカンタベリー大司教の司法権に私が介入すべきではないのです。」*Spanish Letters*, vol. iv, part ii, pp. 676-683. no.1073, K. u. K. Haus-Hof-u. Staats. Arch. c.228. no. 30. このオリジナルは自筆で六頁に亘ってフランス語で書かれている。この書簡は六月一日に皇帝の元に届けられたことが裏書されている。

(7) シャピュイから皇帝に宛てた書簡 一五三三年五月二十九日

「王妃の処遇についてノーフォーク公は次のように言いました。「王はわが王国の法により、アーサー王子（王の兄）に由来する寡婦産を王妃に支払う義務はもうない。さらにこの先の議会で通された法のため、王は王妃を一層厳しく扱い、王妃が今持っている寡婦産をも減らしてしまうかもしれない。王妃がその法に従おうとしないから」と。」*Spanish Letters*, vol. iv, part ii, pp. 691-700, no. 1077, K. u. K. Haus-Hof-u. Staats. Arch. c.228, no. 33 このオリジナルは自筆で九頁に亘ってフランス語で書かれている。この書簡は六月三〇日に皇帝の元に届けられたことが裏書されている。

る。

この(6)と(7)の記述は上訴禁止法のことにならずにか触れていないのであるが、やはりイングランドの重臣達がこの法を基準にしてこの離婚問題を解決しようとしていたことがわかる。

(34) 一五三三年三月三十一日付のシャピュイの書簡（本稿五一頁）と四月一〇日付けの書簡（本稿五三頁）の中で上訴禁止法の趣旨と内容が示されている。

(35) *Spanish Letters*, vol. iv, part ii, p. 384, no.899, K. u. K. Haus-Hof-u. Staats. Arch. c.22, no. 6.

(36) *Spanish Letters*, vol. iv, part ii, p. 626, no. 1057.

(37) *Spanish Letters*, vol. iv, part ii, pp. 650-656, no. 1064, British Library (以下BLと略す), Add. MS. 28585, f.264. このオリジナルは一二頁に亘りスペイン語で書かれている。この史料は *Spanish Letters* では一五三三年四月の文書中に含まれている。また *Spanish Letters*, vol. iv, part ii, p. 656, no. 1065. の脚注によるとこの皇帝（顧問）会議は、グラヴェル主催で行われたらしい。

(38) スペインの D'avalos とよばれる町の出身の法律家で、カール五世の信任が厚かったということしか知られていない。ローマでのキャサリンの訴訟で帝国大使を補佐するため、皇帝から遣わされた。

(39) この箇所については、これがオリジナルに記されているのかどうかは不明である。 *Spanish Letters* には収録され

ていない。*Letters & Papers*, vol. vi, p. 252, no. 568. に収録されている。現在 *Letters & Papers* に収録されている史料を入手中である。

(40) *Spanish Letters*, vol. iv, part ii, p. 630, no. 1058.

(41) *Letters & Papers*, vol. vi, p. 254, no. 569, Public Record Office, Rymer Transcripts, vol. 145, no. 5, p. 44.

このオリジナルは二頁で、「かつてブリュッセルにあり、今は失われてしまった文書のフランス語のカタログ (Catalogue) から」と注釈が付されている。*Spanish Letters* にはこの史料は載せられていない。

(42) Don. Fernando de Silva, Count of Cifuentes, Standard Bearer of Castile, 一五三三年四月からローマ駐在神聖ローマ帝国大使。

(43) *Letters & Papers*, vol. vi, p. 254, no. 570, Granvell Papers, vol. ii, no. 33. この史料には「スペイン語で書かれたもの」としか記載されていない。

(44) *Calendar of State Papers and Manuscripts, existing in Archives and Collections of Venice*, vol. iv, ed. Rawdon Brown, London, 1871, rep. 1970. の中でも上訴禁止法のことについて在イングランド・ヴェネチア大使 Carlo Cappello は語っているが、わずかしき記載していない。Cappello は上訴禁止法案通過をヘンリーの離婚問題との関連でのみ見ている。「C. Cappello から総督に宛てた手紙」の中で、「聖職者会議でイングランド人は毎日最大限の努

力を重ね、精力を傾けて離婚問題を討論しています。そしてこの王国内で教皇への上訴と教皇の権威を取り上げようとしています。もし教皇が離婚に同意しないのならばイングランド人は教皇への従順を引つ込めてこの問題を (自分たちで) 解決するだろうと思われます。」と Cappello は述べている。*ibid.*, vol. iv, p. 315, no. 867.

(45) オリジナル史料には、抗議のため特別大使をイングランドに派遣しようという皇帝 (顧問) 会議の提案に対して No. が皇帝の自筆で記されていると *Spanish Letters* の脚注には書かれている。*Spanish Letters*, vol. iv, part ii, p. 658.

(お茶の水女子大学大学院人間文化研究科博士後期課程)